

「発話困難な重度身体障がい者」の文章作成における実態

——新たな介助概念への一考察——

独立行政法人日本学術振興会 天島大輔

1. 目的

「発話困難な重度身体障がい者」の文章作成過程の実態とはいかなるものか。 障がい者の自己決定に関する先行研究では、岡原正幸が目的と手段の二分法で読み解き、「What to do (何をするか)」は障がい者が占有する領域、「How to do (いかにするか)」は介助者の介入が不可避な領域であり、そこにコンフリクトが生じるとした(岡原 1990 = 2012)。一方、前田拓也は「What to do」においても介助者の介入を排した形は難しいと異議を唱えた(前田 2009)。しかし、常に通訳介助が必要な「発話困難な重度身体障がい者」の自己決定を、この2つの概念だけで捉えるのは適当だろうか。本研究では「発話困難な重度身体障がい者」である論者の文章作成過程を分析することで、新たな介助概念の検討を目的とする。

2. 方法

論者と介助者4名を対象に、知人から来た架空のアドレス変更メールに返信する場面を設定し、様子を詳細に分析した。各介助者との会話を録音した上で、文字に起こして資料とした。また、各介助者に対して通訳歴や調査内容に関するインタビューを行った。

3. 結果

第1に、論者の文章作成の過程は、論者と介助者の相互行為により成り立っており、主に3つの技術が介入していた。言葉を導き出すための介助者への意図的な「戦略的誘導」、介助者が自身の解釈で正しいかを確認する「解釈的質問」、論者の自己決定における介助者からの選択肢の「提案」である。第2に、論者は介助者の先読みである「解釈的質問」や「提案」を柔軟に受け取ることで、協働作業の中から自己決定を紡ぎ出していた。論者の言葉を介助者が読み取る際、その読み取り方によって論者の言説は変化する。時には時間的コストも考え、介助者の読み取り技術や共有知識に合わせ、自分の言いたいことを抑えることもある。一方で介助者からの「提案」や「解釈的質問」によって、論者が新たな気づきを得られることもある。つまり、「With who (誰とするか)」が論者のコミュニケーションにおいて極めて重要であることがわかった。

4. 結論

以上により、論者の文章作成の過程では個別的な内容ほど「With who」の問題がせり出し、論者は介助者によってコミュニケーションの質や「What to do」が変容する可能性を常に持っている様子がわかった。すなわち、「発話困難な重度身体障がい者」の文章作成過程においては、その自己決定を「What to do」「How to do」の概念だけで捉えるのは難しく、「With who」を含む3つの要素が複雑に絡み合っている実態が明らかになった。ただし、「With who」の「who」とはある程度の共有知識を持った介助者が前提である。共有知識がなければ協働作業は成立せず、「With who」の概念自体が意味をなさない為である。

本研究は、2019年立命館大学大学院先端総合学術研究科に提出した博士論文「『発話困難な重度身体障がい者』の新たな自己決定概念について——天島大輔が『情報生産者』になる過程を通して」を一部加筆したものである。

文献

前田拓也, 2009, 『介助現場の社会学——身体障害者の自立生活と介助者のリアリティ』生活書院。

岡原正幸, 1990=2012, 「コンフリクトへの自由——介助関係の模索」安積純子・岡原正幸・尾中文哉・立岩真也『生の技法 第3版』生活書院。

天島大輔, 2012, 『声に出せない あ・か・さ・た・な——世界にたった一つのコミュニケーション』生活書院。